琉球大学学術リポジトリ

Usefulness of separately evaluating lymphatic and venous vessel invasion in cervical adenocarcinoma

メタデータ	言語:
	出版者: University of the Ryukyus
	公開日: 2021-04-20
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: Taira, Yusuke, 平良, 祐介
	メールアドレス:
	所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/48289

令和　2年　6月　12日

（別紙様式第７号）

論　文　審　査　結　果　の　要　旨

報告番号	＊課程博第　　号	氏　名	平良祐介

論文審査委員		
	審査日	令和　2年　6月　9日
	主査教授	加留部　謙之輔　印
	副査教授	高山　千利　印
	副査教授	齋藤　誠一　印

（論文題目）

Usefulness of separately evaluating lymphatic and venous vessel invasion in cervical adenocarcinoma

（論文審査結果の要旨）

子宮頸癌の 20-30%を占める組織型である子宮頸部腺癌は、特に若年女性において増加傾向にある予後不良な疾患である。子宮頸癌の大半を占める扁平上皮癌に比べて放射線療法や化学療法に感受性が低いため、手術療法が治療の重要な役割を担うが、術後補助療法も確立されておらず、再発や予後の予測による治療成績の改善を図る必要がある。

本研究では子宮頸部腺癌の手術検体を用いて、婦人科腫瘍の分野では規定されていないリンパ管と静脈を区別した脈管侵襲の評価を行い、予後や再発の予測に有用であるかを検討した。1993 年 1 月から 2017 年 4 月に当院で腹式広汎子宮全摘出術が施行された症例で、D2-40 に対する免疫組織化学染色およびビクトリアブルー・HE 二重染色を用いてリンパ管と静脈を区別して脈管侵襲の評価が行われた子宮頸部腺癌または腺扁平上皮癌ⅠB1-ⅡB 期、計 108 症例を診療録から後方視的に抽出して検討した。脈管侵襲の評価は頸部間質浸潤の最深部で行われた。統計は群間の比較にはフィッシャー正確検定、生存率・無病生存率の比較には Kaplan-Meier 法、ログランク検定、多変量解析には Cox 比例ハザードモデル、多重ロジスティック回帰分析を用いた。

症例の年齢の中央値は 46 歳（24-68）、観察期間の中央値は 60.5 カ月（4-292）であった。FIGO 進行期ではⅠB1 期 82 例（75.9%）、ⅠB2 期 17 例（15.7%）、ⅡA1 期 1 例（0.9%）、ⅡB 期 8 例（7.4%）であった。組織型は腺癌 92 例（85.2%）、腺扁平上皮癌 16 例（14.8%）であった。再発は 22 例（20.4%）で再発までの期間の中央値は 20.5 カ月（2-132）、再発部位は骨盤内のみが 9 例（40.9%）、遠隔臓器のみが 8 例（36.4%）、骨盤内と遠隔臓器の両方が 5 例（22.7%）であり、予後は無病生存が 92 例（85.2%）、担癌生存は 7 例（6.5%）、原病死が 9 例（8.3%）であった。全 108 症例の 5 年無病生存率は 78.5%、5 年生存率は 91.2%であった。全 108 症例のうち、リンパ管と静脈いずれの侵襲もないものが 66 例（66.1%）、静脈侵襲のみ認める症例が 7 例（6.5%）、リンパ管侵襲のみ認める症例が 24 例（22.2%）、両方の侵襲を認める症例が 11 例（10.2%）であり、リンパ管と静脈両方への侵襲がある群で頸部間質浸潤と骨盤内リンパ節転移が多く、再発リスクが高くなっていた。多変量解析ではリンパ管侵襲と静脈侵襲いずれも独立した予後不良因子にはならなかったが、静脈侵襲のみが独立した遠隔臓器再発のリスク因子（p=0.0036）であり、リンパ管侵襲は再発や予後に関するリスク因子にはならなかった。

以上の結果より、子宮頸部腺癌において脈管侵襲をリンパ管と静脈を区別して評価することは遠隔臓器再発や予後の予測に有用であると結論付けた。

備　考　1　用紙の規格は、Ａ４とし縦にして左横書きとすること。
　　2　要旨は800字～1200字以内にまとめること。
　　3　＊印は記入しないこと。

令和　2年　6月　12日

（別紙様式第８号）

最終試験結果の要旨

報告番号	＊課程博第　　号	氏名	平良祐介

論文審査委員	審査日	令和　2年　6月　9日
	主査教授	加留部　謙之輔　印
	副査教授	高山　千利　印
	副査教授	齋藤　誠一　印

最終試験は口頭による公開討論によって行い、以下の件について確認した。

1. 提出論文の内容、意義について十分に把握していること。
2. 研究の目的と方法について熟知していること。
3. 研究成果について正しく理解していること。
4. 関連研究の文献をよく把握していること。
5. 研究結果の展望について確かな見識を有していること。

審査の結果、これらに関連する質問に対して十分満足する回答が得られたため、本学大学院博士課程を修了するに値すると判断し、最終試験は合格とした。

備　考　1　用紙の規格は、Ａ４とし縦にして左横書とすること。
　　2　＊印は記入しないこと。